

報告

熊本県玉名市玉名

馬出古墳調査報告

田 添 夏 喜

一 所在地及び所有者

熊本県玉名市玉名馬出四五九七の五（所在）

中尾和之（所有）

二 古墳の名称 馬出古墳

小字名（馬出）を採り教育委員会（市）で決定した。

三 発掘調査の目的

イ 採土工事にかかり、崩壊されるのでその事前に発掘調査を行うものである。

ロ 古墳の内部構造を明確にし、又築造の年代を知りたい。

四 発掘調査の期間

第一期 昭和四〇年八月二十八日より

同年同月三十一日まで

第二期 昭和四〇年十二月二十四日より

同年同月三十日まで

第三期 昭和四一年三月二十八日より

同年四月三日まで

五 発掘調査担当者

総務

三ツ本大門（熊本県玉名市教育委員会 社会
教育課長） 大磯英夫（同社会教育課長補佐
文化係長）

文化係長）

庶務

磯田 実（同 文化係）

発掘調査責任者

田添夏喜（玉名市文化財保護委員会副委員長
市立玉陵中学校教諭）

調査員

石原幸男（同委員 熊本県立玉名高等学校教
諭） 高木瑞穂（同 同） 鶴上寛治（同
県立玉名高等学校教諭）

協力者 荒木純治（玉名高校考古学部OB）

六 発掘調査結果について

(一) 序文

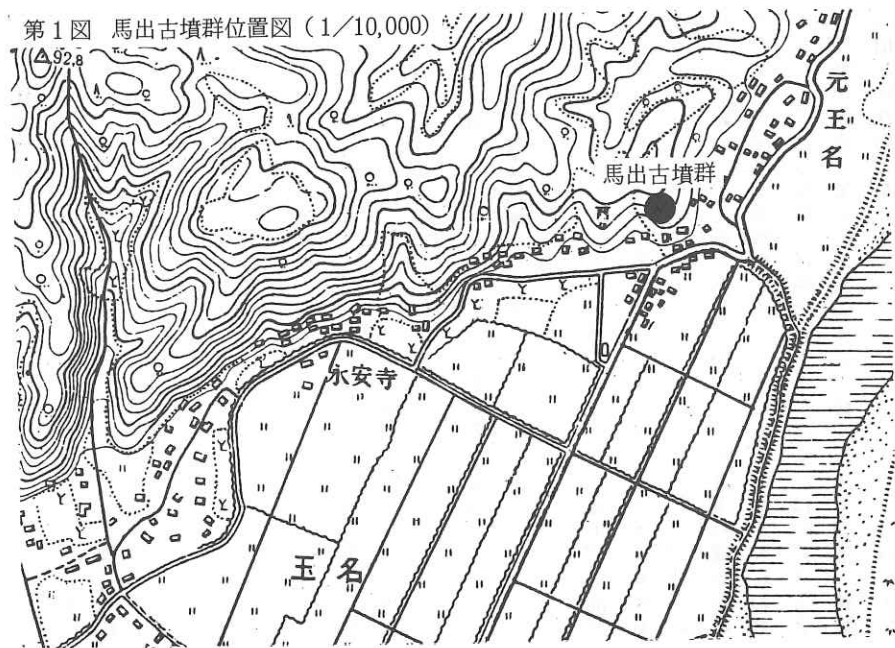
玉名市都心部の北方玉名平野をへだてた二km半、菊池川
とその支流錦川との中間に低い丘陵台地が広がる。この丘
陵の南方は、平野部から比高三〇mの丘陵となり、裾部に
馬出と小路の二小部落がある。昭和三九年度より建設省は
その東を南流する菊池川の護岸工事に着手、用土をこの地
に求めた。この丘陵上に円墳があり、南裾には旧郷社玉名
大神宮が鎮座してこの地域の深い因縁を語っている。神宮
の旧記に次の様に見える。

(前略)「朝廷守護當邦ノ鎮座ト定メ玉ヒ國人中尾玉守命ノ其祭祀ヲ司トラシメ玉フ
 玉守始ノ名ハ中尾長守ト云フ 土蜘蛛津頼御追討之御時長守族人ヲ率テ官軍ニ属シ其日ノ先鋒トシ大ニ戦功アリテ時長守ヲ中尾玉守ト命ノ其祭司トラシメ玉フ玉守又ノ名ハ玉杵守ト称ス 古ハ部下ノ司官多其地ヲ今社家邑ト云フ 又古語ニ相傳フ此地始土車ト云フ蓋シ土蜘蛛ノ名ニ依レルカ玉杵名ニ改則神石ノ事ヲ保其後玉野ト称シ今又玉名ト改ム當社北八丁余ニ一ツ之塚有則朝敵津頼カ城跡ト云傳フ」以下略

というのであるがこの社記の伝える「當社北八丁余ニ一ツ之塚有」というのが即ちこの馬出古墳を指すものではないかと考える。

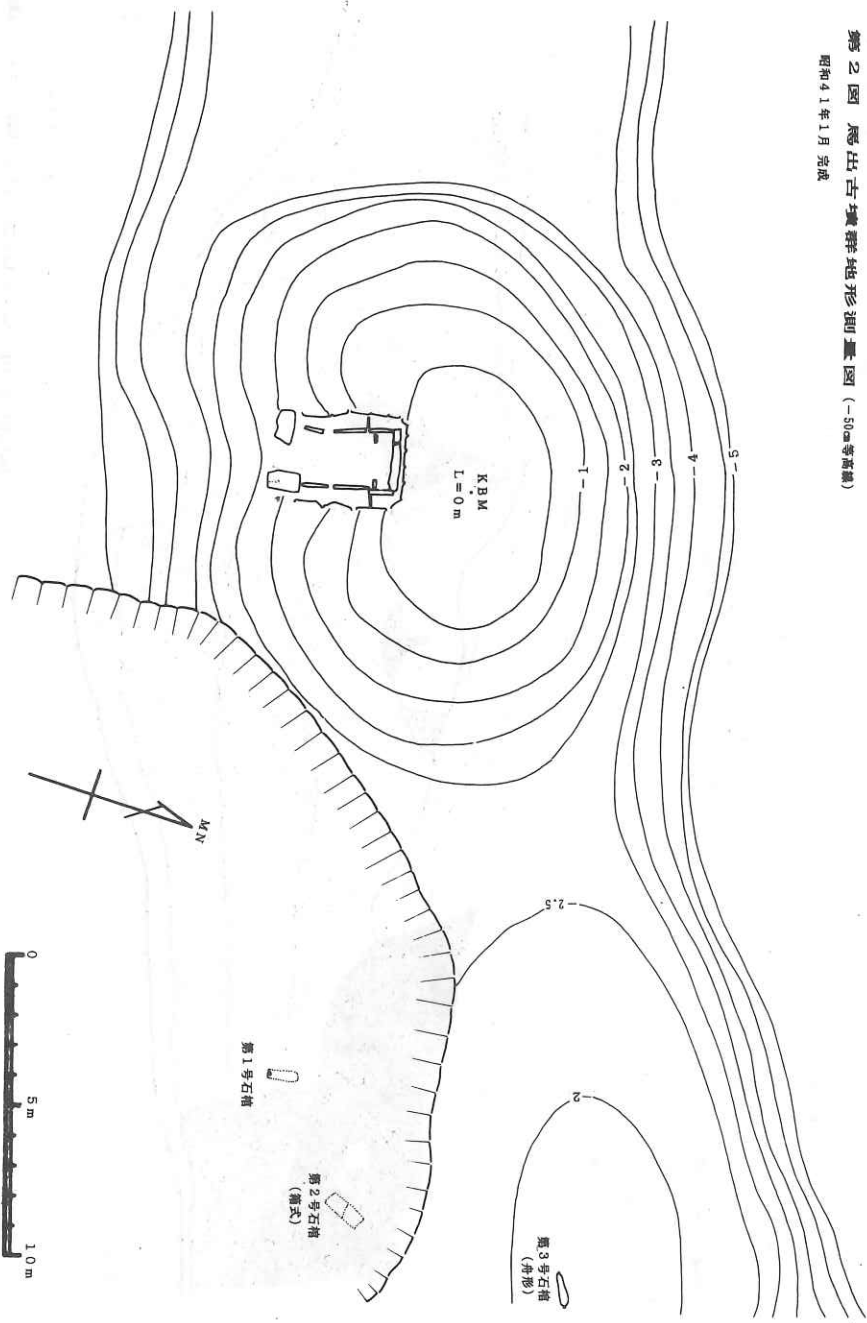
この古墳は先年より土取り工事が行われ、山の下部が削り取られたため昨年(昭四〇)夏、数度の大雨のため山崩れがして頂上古墳の墳丘はその半分を失ない、保存の手だてもない位までに及んだ。そこで止むなく、玉名市教育委員会は緊急措置として法の手続きをとり、発掘調査する事を決め、熊本県立玉名高等学校考古学部の協力を要請しそれを敢行した。

この古墳の西方約一八〇mの地点に裝飾で知られる熊本県指定史跡永安寺東西の両古墳と更に西約一〇〇mの地点



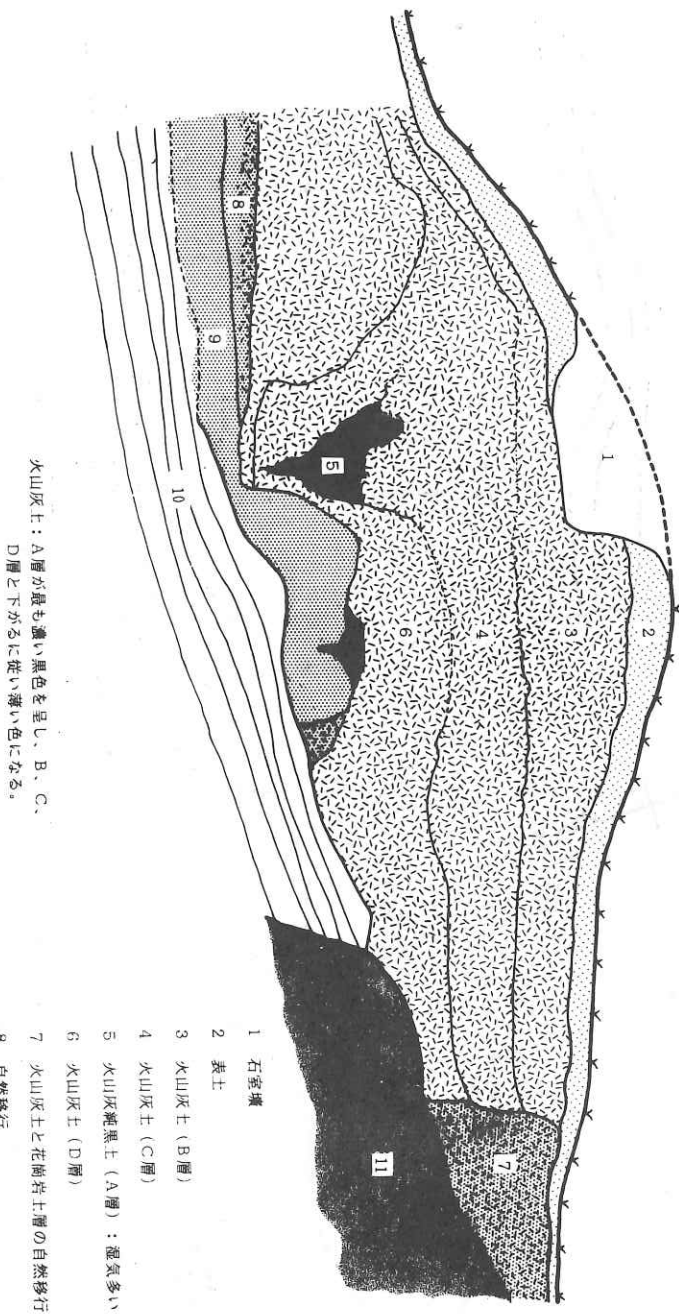
第1図 馬出古墳群位置図 (1/10,000)

第2図 馬出古墳群地形図 (50m等高線)
昭和41年1月完成



第3図 馬出古墳墳丘断面実測図

熊本県玉名市玉名字馬出 昭和41年3月30日



火山灰土：A層が最も濃い黒色を呈し、B、C、D層と下がるに従い薄い色になる。



に大坊古墳があるがこれも装飾古墳熊本県指定史跡で知られている。何れも構造・文様の状態等、馬出古墳と類似の点が見られ、同時代築造のものと考えられる。

(一) 地形 (第1図)

高さ九二mの高峯を中心として東西に延びた玉名台地の湾曲の中に形成された東南端の地面よりの高さ三〇mの頂上に径約一五m・高さ約五mの円墳がある。採土のため現在は封土の東南部の半分を越ゆる程度を失っている。

西方は裾を西へ伸ばし約百m続いた範囲は西隣りの玉名大神宮の社地で小さな谷となって切れる。北方は直ちに四十五度の急傾斜面で深い谷となり自然の周遑の状態をつくる。

東北方二五mのところに扁平な小墳丘があり、これも南裾殆んどを失っている。この地表下に船型石棺が収められていた。その墳丘より北の方は平坦になり三〇mに至って又一つの墳丘を形づくるものがあり、更に北になって急傾斜の谷となる。

東、北の傾斜面の墳丘裾は三段及至四段の段築のようになっているがこれは古墳造営の段築でなく、甘藷畑の跡で山林開墾の名残りである。南方は採土場で今は当初の面影もなく、直ちに馬出及び隣りの小路の古部落となっている。

(二) 墳丘 (第2図、第3図)

地上約三〇mの丘陵の上面殆んどが火山灰土からなり、高さ五m、裾部の径約一六mに築き上げられた円墳である。

堆土の状態は石室壁の直下部になって急に落ちこみ、約二m程度の厚みが最も濃厚な黒色を呈し、一mずつ上へ層をつくって黒色がうすれ、表土近くになり人為的な封土の構築であることがわかった。

古墳のある丘陵の裾を採土工事したため降雨のたびごとに上部が崩れ落ち、石室のあるところから殆ど垂直をなし絶壁をつくっているため墳丘の断面の状態がそのまま表れている。(昭和四一年四月三日現在追記)

(三) 主墳石室の内部構造 (第4図)

イ 羨門部

幅四〇cm、長さ一m五〇cm、厚さ四〇cmの花崗岩の巨石を右に、それとはほぼ同じ大きさの自然石安山岩を六〇cmの間隔をもって両側に立てる。しかし、以前の破壊によってか右の石は四十五度、左の石は約三十五度、どちらも外側(南)へ傾いていた。築造当時この上にけたの役目を持つ石があって、その両側を割石の小口積みの石壁が玄室に続いていたのであろうが、その状態は破壊されていて両側羨門の立石以外何も残っていなかった。

ロ 玄室内部構造

羨門からすぐ玄室になっていた。両側壁、奥壁の三面みな安山岩の割石を小口積みにし、間口を二m八〇cm奥行を三m五〇cmの大きさに築き奥へ僅かに広がる梯形に囲んで上部へ漸次小さくし、床面より二m一〇cm、前方の羨門付近で一mのところまで小口積みの壁は切れ、天井部全面失われてその石材も壁に使ったと考えられる石材の外は残っていなかった。近所の古老の話によれば大正中期頃に玉名大神宮の参道に記念碑を建設する際に石材をこの山の上より掘り出して碑石に当てたというが、この古墳の破壊が或はこのときではないかと考えられる。

玄室の奥壁に接し、平たい凝灰岩大小九個の切石を幅二m、奥行六六cm、高さ一m三〇cmの箱型に組み、厨子型の石棺を設置してあった。

露出作業に際し厨子の前面に、両開き式の扉のようになってはまっていた二個の大石は検視の結果断面の状態や石の形からして、厨子上部を被う天井石で、前面を支えるものがないため、自体の重みと上部からの圧力によって中央部より欠け落下したものであることがわかった。厨子内は凝灰岩の切った平石を二枚継ぎ並べ朱をかけて床面をつくり、左端(西)を少し高く刻み上げ、二〇cm間隔に、径一六cm、深さ三cm程度に底を僅か平らに丸底の穴を二個並べ

てあった。人骨は残っていなかったが、二人併葬の枕の備えつけである。

厨子正外面に縦二m一〇cm、横一m八〇cmの広さの広場が設けてあった。羨門から羨道へつづく突き当りを副葬品置場としたのであろうか。その両側に壁面につけてそれぞれ一基つづの屍床が設けられ、右側では幅五〇cm、長さ一m八〇cmの広さに凝灰石を切った平石四枚を敷き並べ、内側だけに厚二〇cm、長さ二mに、二個の角石を三〇cmの高さに取りつけて屍床の縁とし、左側では幅五〇cm、長さ一m九〇cmの矩形に同質の幅二一cm、長さ二mの広さにつくり、平石四枚を並べて敷き、内側だけ右屍床同様に厚さ二〇cm、長さ二mに二個の角石を三〇cmの高さに取りつけて縁とし、屍床をつくってあった。

(四) 遺物とその出土状態

イ 遺物の種類

遺物は装身具、武具、馬具に大別される。先ず厨子型石棺内では特に目だつものとはなく、鉄鍔片刀子片等、合せて九点程度でまことに貧弱すぎる。

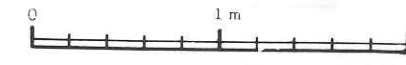
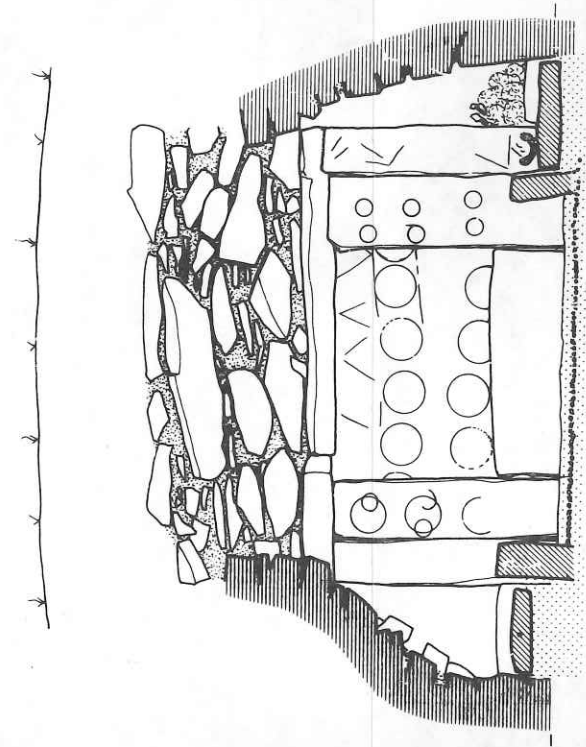
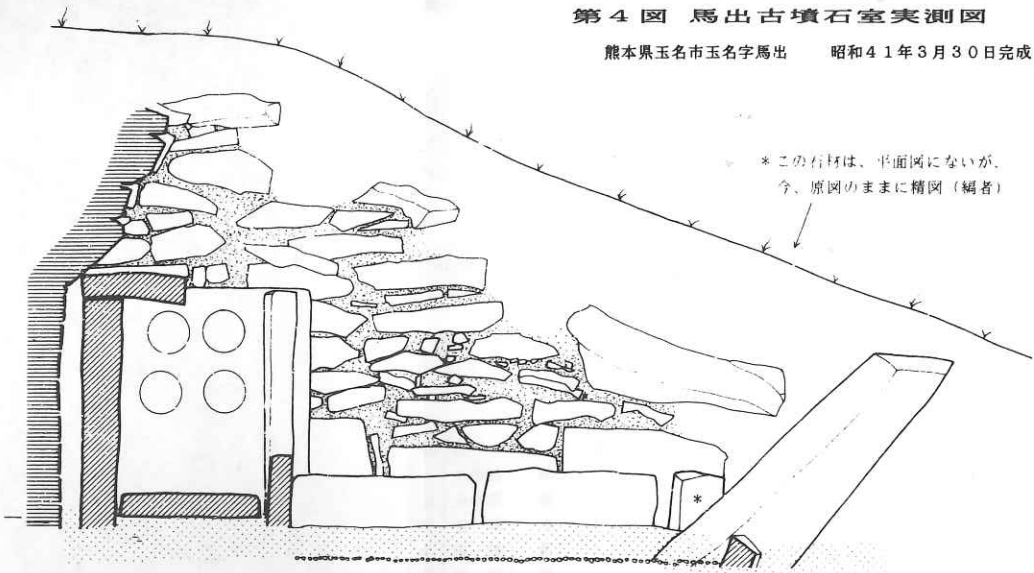
ロ 遺物の出土状態

東(右)屍床では中央部石敷の継目より瑪瑙勾玉一個、南寄りのところから金環一個、中央屍床縁の継目付近から平根式鉄鍔一本とその他鉄片数片が出土した。

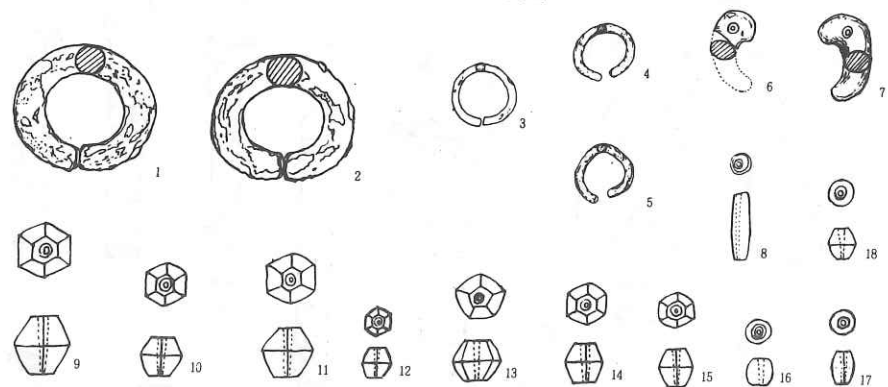
第4図 馬出古墳石室実測図

熊本県玉名市玉名字馬出 昭和41年3月30日完成

凡 例	
○	銀環
⊙	金銅環
↑	鉄鏃
◇	水晶製切子玉
□	管玉
◊	刀片
∴	ガラス小玉
⊖	鉄地飾り金具
⌘	響
⌘	馬頭骨
⊕	粘土塊

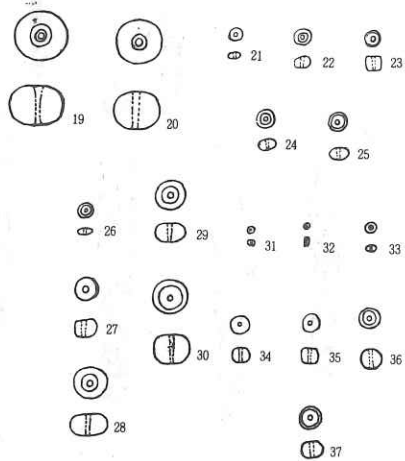


第5圖 馬出古墳出土副葬品実測圖



番号	種別	材質	個数
1	金銅環	銅	1
2	金銅環	銅	1
3	金環	金	1
4	銀環	銀	1
5	銀環	銀	1
6	曲玉	水晶	1
7	曲玉	めのう	1
8	管玉	碧玉	1
9	切子玉	水晶	1
10	切子玉	水晶	1
11	切子玉	水晶	2
12	切子玉	水晶	1
13	切子玉	水晶	1
14	切子玉	水晶	2
15	切子玉	水晶	9
16	算盤玉	水晶	1
17	算盤玉	水晶	1
18	算盤玉	水晶	12

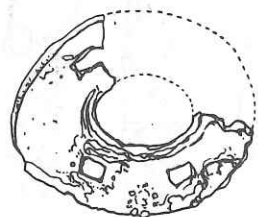
* 個数は別表参照



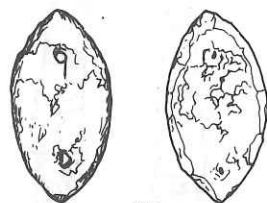
ガラス製玉一覧表

番号	種別	色	個数
19	大玉	濃青	1
20	大玉	濃青	1
21	小玉	淡青	2
22	小玉	淡青	2
23	小玉	淡青	1
24	小玉	淡緑	1
25	小玉	淡青	3
26	小玉	群青	4
27	小玉	群青	1
28	小玉	濃青	1
29	小玉	濃青	1
30	小玉	濃青	1
31	小玉	黄	25
32	管状小玉	黄	7
33	小玉	群青	28
34	小玉	群青	9
35	小玉	群青	5
36	小玉	埋木	1
37	小玉	群青	9

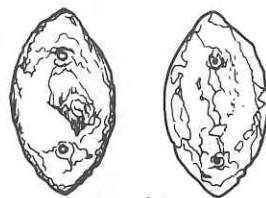
* 個数は別表参照



38 鐙 (鉄製)



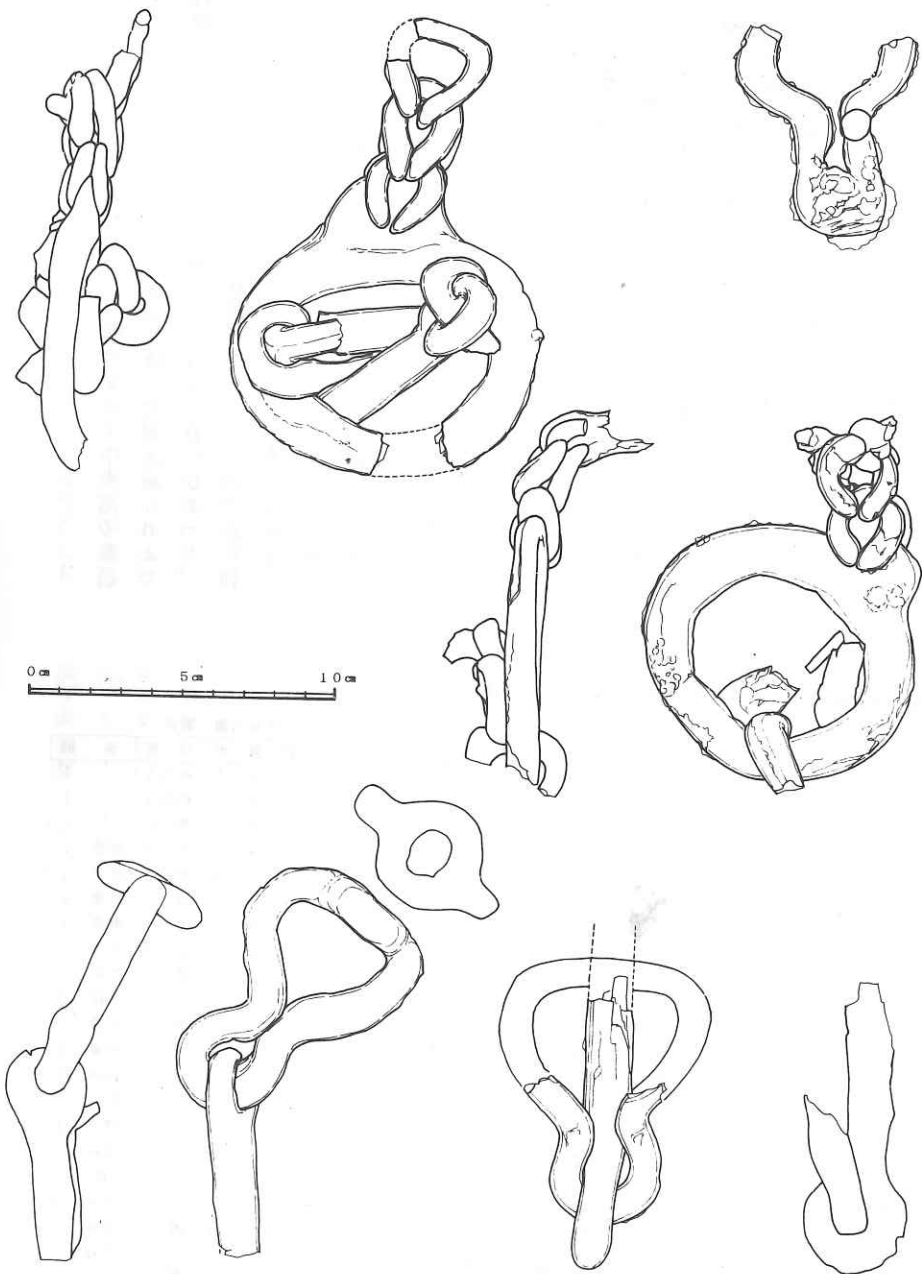
39 鉄地銀張り飾金具



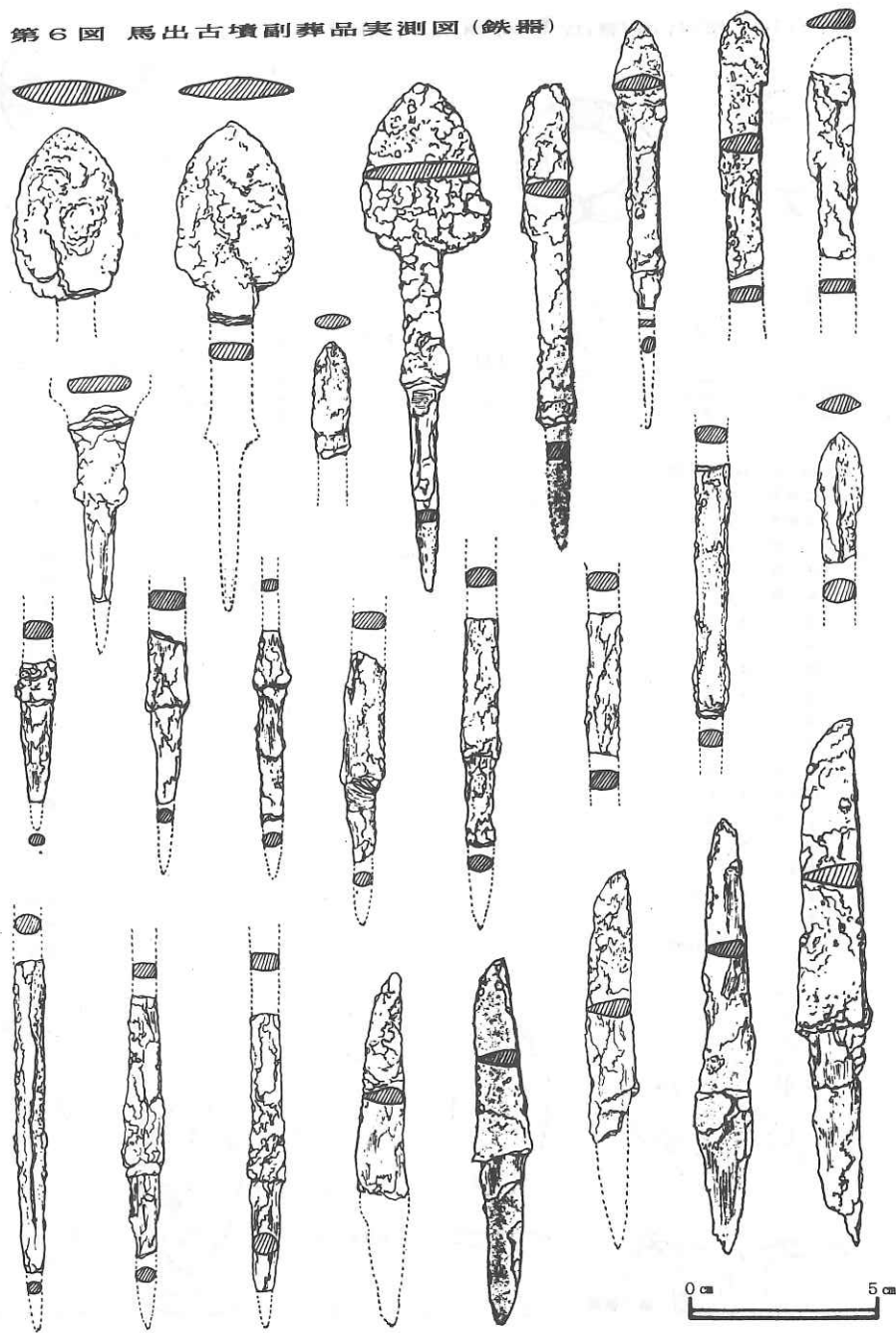
40 鉄地銀張り飾金具



第7图 馬出古墳副葬品実測図(馬具)



第6图 馬出古墳副葬品実測図(鉄器)



西(左)屍床では銀環一対内一個は屍床上中央部の敷石の継目から、他の一個は二・二cmほど離れた屍床障石外よりそれぞれ発見された。その他に五点程度の鉄片があった。石棺前面の、中央広場では鉄鍬及び刀子、刀鐔や鉄片類数十点と、水晶製勾玉、切子玉、なつめ玉、そろばん玉等総数四十三個、ガラス製大玉二個、小玉百一個、碧玉管玉一個等の玉類と金銅環二個、長さ五cm、中央最大幅二・五cmの木の葉型をした馬具飾金具(鉄地銀張り)と考えられる同形二個、刀子五口等、玉類は大体まとまっていたが他の物を入り乱れ、中央広場の西北隅径一mの範囲内に集中的に出土した。

又石棺外東側壁との間では長さ一m三〇cm、幅五〇cmの範囲に鉄鍬片四点の他に鉄地金銅張り飾金具の残欠一点があり、又石棺の奥外角右側壁の間の付近に馬頭骨の副葬があった。腐蝕が甚だしく、形状も把握困難の状態で臼歯の並ぶ顎骨の部分を認める程度であった。(鹿兒島大獣医学部に送り調査中)この馬骨の副葬位置より対角線で結ばれた前面の西南隅に馬具としての轡が完全なすがたで出土した。

右棺外、西(左)側壁との間には鉄鍬片五六点が乱れて発見された。

(六) 陪塚石棺 (第8図)

イ 第一号石棺

主墳の東方約二〇m、地上より十数mの、当時の南傾斜面に発見された。丘陵下部を採土工事によってえぐり取られ、多量の降雨によって崩壊しその土中に入ったもので、棺材凝灰岩の風化が甚だしく殆んど灰状に粉碎され、その一部分に朱の塗られた残片を認めただけで石棺の形式も全然確認することが出来なかった。完全に近い人骨が遺存されながら、ばらばらに散乱した中に瑪瑙勾玉二個、ガラスの色小玉六〇個、滑石製の平たい玉一個を検出した。尚人骨は採取して長崎大学医学部第二解剖学教室で調査中である。

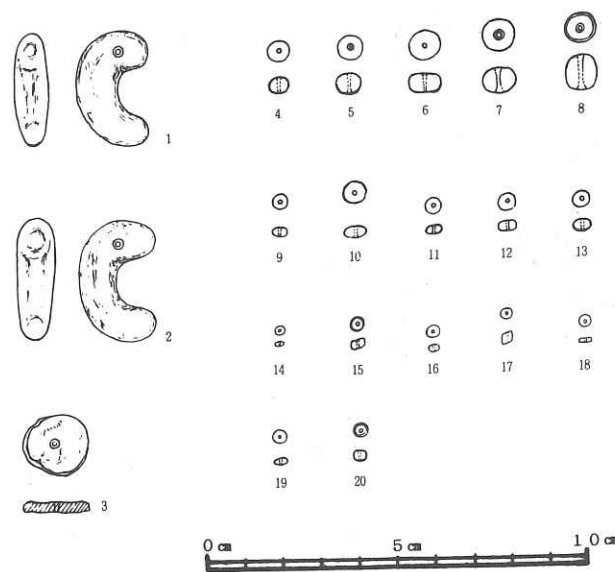
ロ 第二号石棺 (第9図)

地上約二〇mのところ、第一号棺より約五mの斜上にあたる。第二号降雨の際上層が大規模に崩れ落ち、その断面に石棺の片方の側面が露出されたもので内側の幅三五cm、長さ約一m九〇cmの大きさの凝灰岩の大小七個の切石をもって組合わされた箱式石棺で内部主体の人骨、副葬品等何も存置していなかった。朱粉を豊富に使用し内部は真紅に染まり、床面は川原の小石を敷きつめ、全面八cm×九cmほどの厚みで粘土層に達した。盛り土のない平坦地面下に埋葬されていたが、元は墳丘があった筈である。後世こども

採集玉類一覽表

群別	種別	材質	色	個数
1	勾	玉	めのう	1
2	勾	玉	めのう	1
3	平	滑	石	1
4	丸	玉	群青	1
5	丸	玉	群青	1
6	丸	玉	群青	2
7	丸	玉	群青	1
8	丸	玉	群青	1
9	丸	小	淡緑	3
10	小	小	淡青	1
11	小	小	群青	5
12	小	小	群青	4
13	小	小	群青	7
14	小	小	群青	1
15	小	小	淡緑	1
16	小	小	黄	3
17	小	小	淡緑	4
18	小	小	淡緑	2
19	小	小	淡緑	19
20	小	小	淡緑	4

第8図 第一号石棺副葬品実測図



甘藷畑開墾で開かれたかとも考えられるが分らない。

ハ 第三号石棺 (第10図)

第二号石棺の斜上六m、今は採土によってすっかり切り取られ空間になるが墳丘だけの北半が残っている。主墳の東方二七mの小墳丘の突端、表土下三〇cmの深さに埋葬されていた。付近の古老の話によれば明治の頃より部落民は香花を献じて礼拝してきたのが何時の頃ともなく草木の茂るに從い忘れ去られて今日ではかえりみる人もないようになっってしまったということである。石棺は全長一m九二cm中央最大部の幅六〇cmあり、凝灰岩製割竹型の両端を円くつくり、棺蓋のみ両端に綱掛突起を刻みつけた船型石棺で棺身、棺蓋共一m四一cmのところ五一cmを継ぎ足して造っていた。棺底の片方に枕を刻みつけ、内部全面に紫味を帯びた朱粉を塗り、又は敷いてあり、頭部を東北方に向けて埋葬してあった。

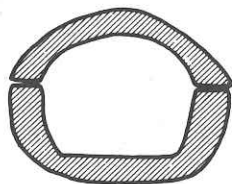
主体の人骨、副葬品共に残っていなかった点は第二号棺と同様であった。

(七) 馬出古墳裝飾文様 (第11図)

昭和四十一年三月実施の第二期調査は主として全面的な総整理を行うことで、其の中に裝飾文様の検出を含めていた。そこで先ず厨子内外の洗浄にかかった。その結果奥壁及び両側壁、前面左右の立飾石等に円文を確認した。一部

第10図 馬出古墳第3号石棺実測図

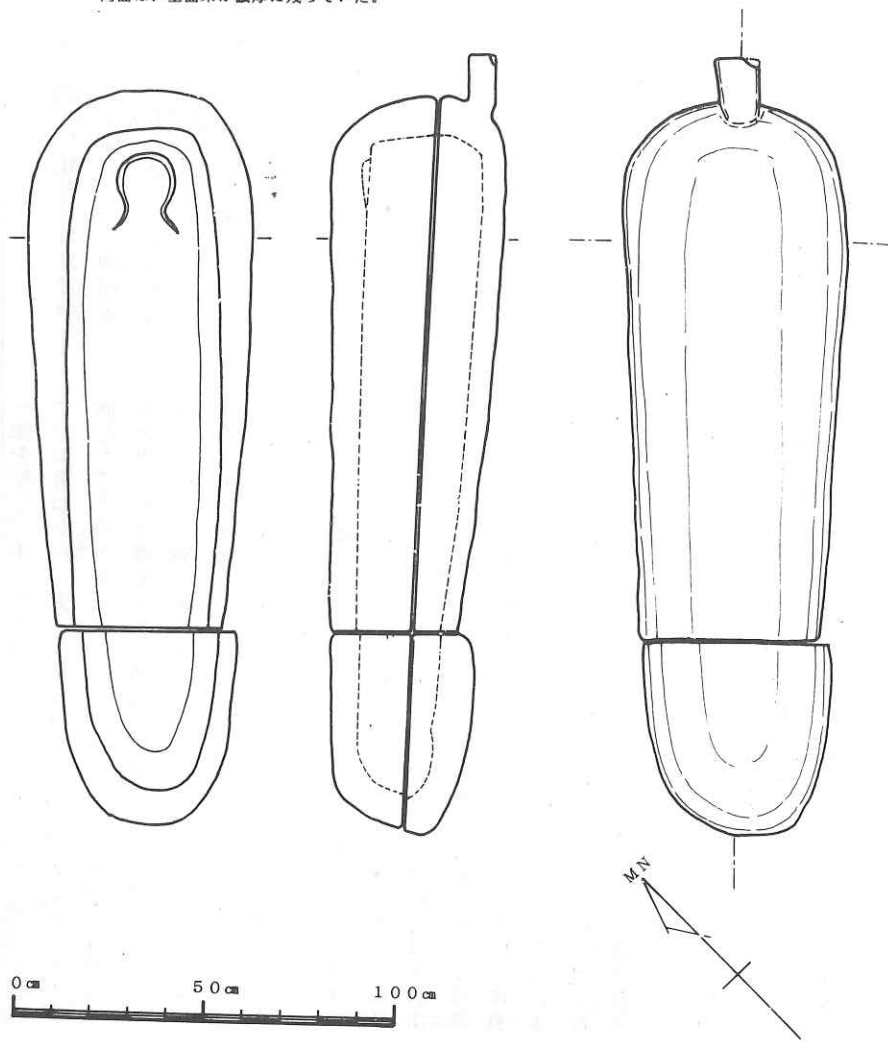
熊本県玉名市玉名字馬出 昭和40年12月



備考：棺身、棺蓋共に後部は別個の石材で造り足してある。(全部 凝灰岩)

内面は面の調整はよいが、外面は荒削りになっている。

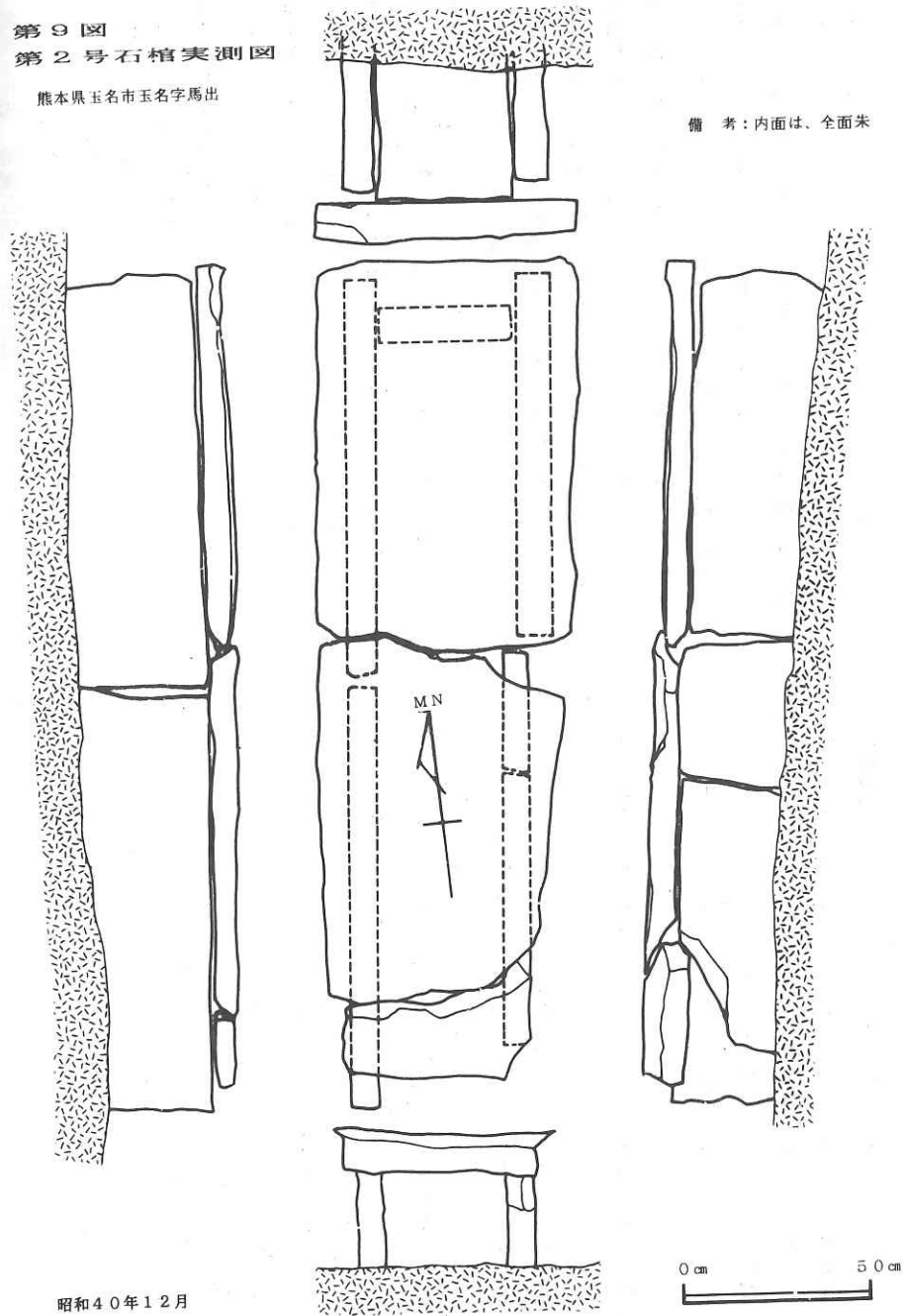
内面は、全面朱が濃厚に残っていた。



第9図
第2号石棺実測図

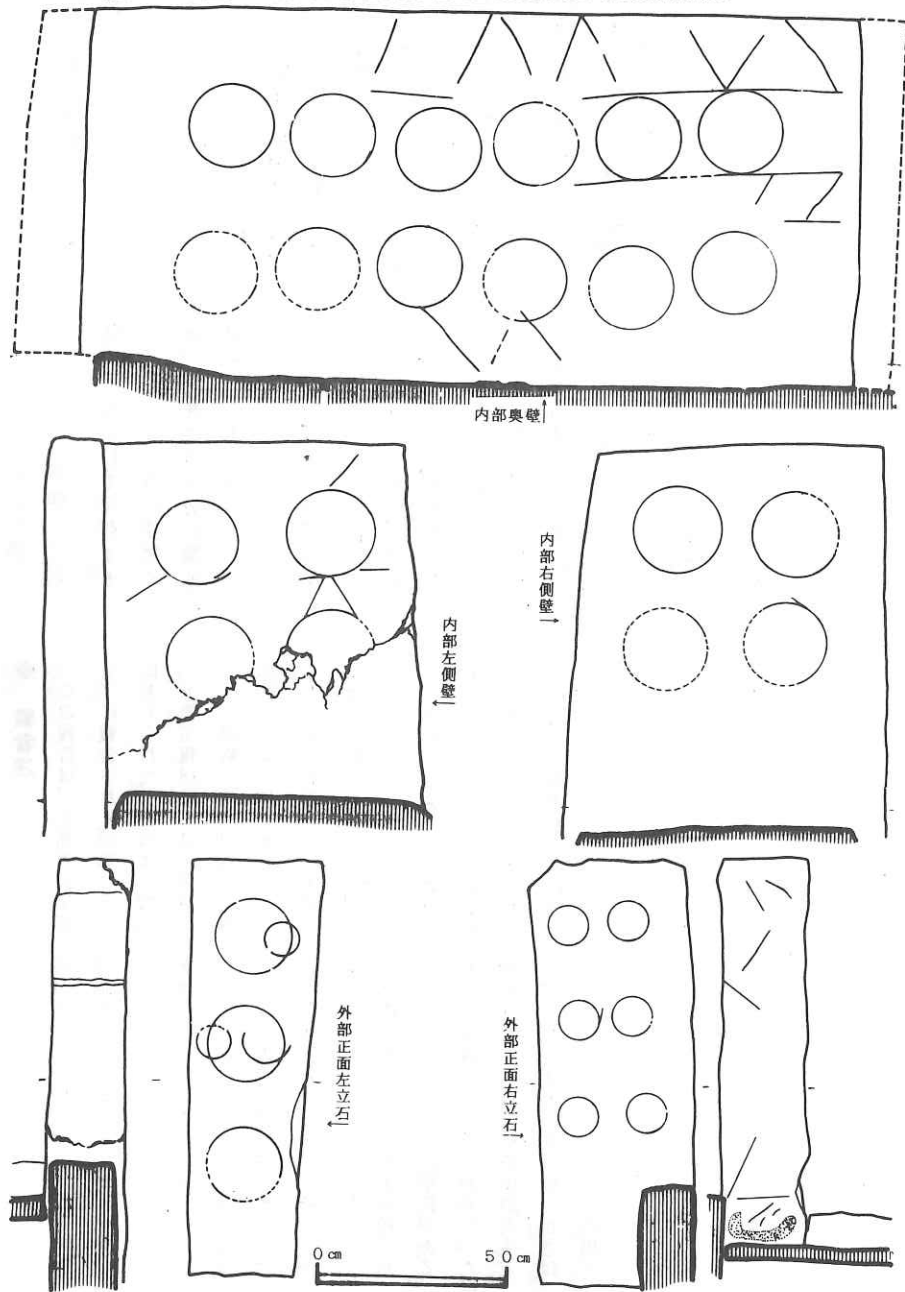
熊本県玉名市玉名字馬出

備考：内面は、全面朱



昭和40年12月

第 1 1 図 馬出古墳石厨子裝飾文様実測図



分外面の風化のため消滅したところも少なくなかった。

イ 厨子内奥壁

横二m、縦一mの平面に削り均らされた凝灰岩のほぼ中央に、径二一cmの円をコンパスをもって線刻し、六個同大に二行に並べてあった。僅かに列の乱れがあり、石面の左右、上下に二〇cmほどの空間をとってあり、各円の空間に大きな鋸歯文を配した一つおきに朱を塗った痕跡が僅かながら認められた。

ロ 右側壁

縦一m、横八〇cmの壁面を中央よりやや上部中心に径二一cm同大の円を四個縦横に並べ線刻してあった。円内に朱を塗ったであろうが消滅して見ることができなかった。

ハ 左側壁

左側壁は右側壁に対称させ、その配置構成にも細心の配慮が行届いていることに気付く。各円の間の空間に三角形斜線と考えられるものが僅かに認められた。又コンパスが不完全のため生じた二重になった部分が目につき、興味的であった。

ニ 外部正面の両立飾石

左右では縦一m一〇cm、横幅三二cmの凝灰岩の石面に、中央に径二〇cmの円を縦に三個、第一円と第二円を九cmの間隔に、第二円と第三円を一一cmの間隔をおいて並べ、第

一円では円周上の右に中心をやや右に寄せた半径四cmの小円一個を配し、第二円では円周上の左に中心をやや右に寄せて一つ重ねかけ、更に右にかけた小円では左と同じ円を計画したのであるが、コンパスの脚がずれて途中で中止したかと思われる痕跡があり興味をそそるものである。第三円は一二cmの間隔で第二円の径に同じ大きさをもって刻みてみ下半分が磨滅し見えていなかった。この石に接した厨子型石棺の左側壁の小口には中央よりやや上に二本の平行線を横に入れたものがあった。

右の石では四〇cm幅の面にやや上に寄せ小円を二個ずつ横に並べたものを三段におき、上段では上縁より一〇cm下に径一〇cmの小円を五cm間隔で横に二つ、中段ではそれより一五cm下へ同大小円を少しせまくした間隔に同じように並べようとしたであろうが左円のコンパスが、左回しに引いた片脚が右に上げるひょうしに急に開いて結ばらないままになっている点が目についておもしろい。下段ではそれより一六cm下にこれも同大の小円を七cmの間隔で横に並べてあった。

更にその石に接して厨子型石棺右側壁の小口がこれに並んで立ち、その面には大きな三角形を配したと考えられるのが消滅して一部分の線が斜に僅かに認められる程度であった。又この石面の最下部のあたりに舟型になった朱が残

っていた。

七 古墳の処置について

調査完了後、解体し玉名大神宮境内に復元して保存することとなったので、石材は山の下におろして付近の空地に集積した。現在の造園ブームで盗難、散逸には充分の警戒を払っている。採土現場の整理次第その工事に移る。

八 出土品の処置について

出土品は全部一応簡単な整理を行ない、実測、同大の図を作製し、復元接合出来るものは残らずそれを行って、有彩色・無彩色の二枚の写真を撮り、発見届、及び遺物保管証を取りまとめ法上の処置を済ました。現品は特に紛失盗難、破損等なき様充分の注意を払い、玉名市教育委員会で保存箱に整理し、出土品登載簿に記載した後、当委員会事務局金庫に格納している。玉名市文化会館の完成後は、この中の博物館展示室に出陳し一般の参観に供することになっている。

(昭和四一年三月脱稿)

※ 編者注

この報告は、玉高考古学部部報第18号(昭和四十二年七月十九日)に報告された原稿に若干の補記を加え、県・国への正式報告にあてられたものようである。

玉考部報18号には、発見のいきさつを次のように記す。

「(前略) 菊池川護岸工事の採土にかかり、昭和四十年五月長端部に横穴式石室墳を中心とする数基の古墳が発見された。今は採土により崩壊している約二メートルの角傾斜面にも採土工事によって船型石棺(第一号)らしいものが出土した。ついで、四十年七月同じようにして、それより約五メートル上部より箱式石棺一基が発見された。その西方上端に二十メートルの墳丘がある。横穴式の小口積みの石室をようする大古墳であることがわかった。」
編者も当時、考古学部の三年であり、第二号石棺を田添先生と本田功・赤瀬恵らと共に撤夜で発掘した。深夜の朱の鮮やかさは今も鮮明である。

(西田)